

1. SOHO とは、

- ・ テレワークを基盤に個人や少人数でのビジネスを行う選択肢で「1人ビジネス」という考え方が根幹にある。
- ・ 法人化に関わらず、小規模で自由なワークスタイルである。
- ・ なかでも、エージェント機能が事業開拓や営業活動を支援する側面がある。

2.そもそも SOHO とはなにか？

SOHO は Small Office and Home Office(小さなオフィスと自宅オフィス)の頭文字を取って作られた言葉。

「小規模な事務所や自宅で仕事するひと」と定義するとその範囲は非常に広がる。

SOHO の分類:定義があるわけではない。

- (1) テレワーカー・在宅勤務 :雇用型
通勤せずに自宅やサテライトオフィスなどで勤務する会社員。
- (2) 在宅ワーカー :自営型
パートタイム感覚で、自宅で仕事をしているひと。
- (3) フリーランス・専門職
WEBデザイナーやライターなど主に技術を売り物にした自由業。
- (4) スモールオフィス:
デザイン事務所など小規模オフィス。
- (5) スモールショップ
小規模な仕入れ・販売を行う業種
- (6) ベンチャー オフィス
リスクを恐れずに、果敢にこれまでにない新規の事業への挑戦。
- (7) 社会起業家:ビジネスクリエイターオフィス
社会の課題・事業の課題に取り組んで行くためのオフィス

3.これからの時代とSOHO の存在

「WEB2.0革命」は大きく世の中を変えた。
「在宅勤務」などの制度が、本格的に企業に取り入れられ始めた。
政府が決定した「テレワーク人口倍増アクションプラン」の実施など、
今後は、働くスタイルの多様化に伴い、大きく世の中が変化していくであろう。
大企業も「大量供給の時代」から「ニーズに合った小ロット多品種供給時代」へ大変換を起
こしていくであろう。
その結果、企業の中に「ベンチャービジネスやSOHOの集合体」のような形のものに変換さ
れる分野が必ず現出してくるであろう。
昭和22年～24年生まれの「狭義の団塊世代」690万人
プレとポスト団塊世代(昭和19年～28年)を含めた「広義の団塊世代」の人で1906万人の
人間が、やがて「65歳定年」を迎え社会に帰ってくる
その時が、「巨大なテレワーク時代」の出発の時であろう。
これからの時代がどのようになって行くのか、「互いに研鑽しつつ、見つめ、新しい道を発見
し創造していくことが求められ、その核にSOHOの存在が見え隠れする。」

4.「21世紀の創業について」の提言

和田 一夫 国際経営コンサルタントは、著書「大失敗からのビジネス学」(角川書店21ページ)
の中で次のように述べている。

何かを始める際、「リスクの最小化を図る」のも大切である。
「失敗を恐れてはいけない」という心構えと矛盾しているように思われるかもしれ
ないが、そうではない。
現在は、「失敗を恐れる必要のない時代」であるとともに「失敗するのが当たり前の
時代」になっているともいえるのだ。
他の誰もが考えつかないところ、成功の可能性が低いと思われているところに飛び
込んでいってこそ、他の人間が掴めない大きなチャンスに巡り合えるのである。
そして、そうしたビッグビジネスを求めるならば、何度、失敗に直面してもおかし
くない。

失敗を「前提」にして起業するのでは道は拓けてこない。
だが、失敗に対する「防衛策」を考えておくのは賢明なことである。
何度失敗してもいいんだと割り切れているような人であるなら、「やり直し」をし
易くさせる方法論もあるものだ。

リスクというのは、「お金の問題」と「時間の問題」の二つにある。
金銭的な部分でのリスクの最小化を図るのならば、できるだけお金を使わないで済
む方法を考えることだ。
「そんなに虫のいい話はない」と思われた読者の方もいるかもしれない。
だが、実をいうと、この問題は、「二十一世紀型の起業」を考えるうえでは非常に
重要なポイントになってくる。

また、時間のリスクに関していえば、「ダメだったときにはすぐに撤退する潔さ」

も必要になってくる。

たとえば、半年間事業を続けてみたのに、どこにも成功の兆しが見えなかったとする。以前であれば、それくらいの時間は辛抱の範囲といえたかもしれない。だが、現在では、1年が過去の10年にも匹敵する時間の流れになっているのだ。いわば、半年間、芽が出なかったというのは「5年間やっても芽が出なかったこと」を意味する。

「お金」と「時間」のリスクを極力抑えるというのは、ネガティブな発想ではなく、21世紀型のやり方である。

やり直しは何度でもきく。まだ、やり直しがききやすいようにしておけばいい。そうして、失敗を繰り返していけば、やがて大きな成功を手にするに違いない。

5. 21世紀と「Web2.0革命」とSOHOの時代

21世紀は、地域経営への市民の全面参加の時代・商品開発の市民参加の時代・直接参加型社会へ変貌していくであろう。

経済的にも不透明な社会に、過大な「個人投資」はすべきではない。

21世紀は自分の信じる方向のために、SOHOを立ち上げ、価値観の近いSOHOが「社会支援共同体：協働体」として、「グループ化」し全国に「元気で前向きで、夢の詰まっていた時代の再現」を目指すべきだと考える。

「一人でも出来る！二人なら尚できる。3人なら完璧だ！」と叫んだ組織論者がいた。世の中は、大きく変わり始めている。行き詰まりと社会的課題は、山積されている。裏を返せば、「やるべき仕事が無数にあると解釈できるであろう。」新しい時代は、きっと我々の経験と知恵を待っている！

中高年・団塊世代...へ戻る

脳卒中障害者...へ戻る